
宇宙戦艦ヤマト ～地球を愛した少女～

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙戦艦ヤマト ー地球を愛した少女ー

【Nコード】

N0251M

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

西暦2203年、惑星アクエリアスから大量の水が地球に向かっていた。それを防ぐべく、自らのみを呈して、一隻の宇宙戦艦が自爆した。この作品が、自分の初投稿作品です。楽しんでいただけたらうれしいです。

ヤマト。お前はこの星、地球を救えて満足だったのか？
俺は、お前のことがずっと

宇宙戦艦ヤマト 艦橋

惑星アクエリアス。この星は、水が地表をすべて覆っている。他には浮遊大陸の他に何もなかった。

この星で、唯一、人が存在しているこの艦 宇宙戦艦ヤマトにトリチウムが艦載されていく。この物質で地球を救えるらしいが、その代償として『彼女』が犠牲になってしまう。なんで『彼女』が犠牲にならないといけないんだ

「扶桑戦闘副班長、トリチウムの艦載終了しました・・・」

最上甲板で作業していた隊員が俺 扶桑良介に報告してきた。

「・・・ご苦労だった。」

今の自分が言えるのは、これが限界だった

自分の隣にいる200年前の日本の軍服を着ている人。いや、少女は顔を俯かしていた。

この少女は人ではない。艦魂 船に宿る魂 である。艦魂

は、船が生まれると同時に生まれ、船が沈む時には船と共に死んでいく。彼女もその一人だ。

「・・・ヤマト・・・すまない・・・」

彼女 ヤマトは顔を俯かしたままだった。

「・・・扶桑さんが謝る事じゃありません。むしろ、地球を救えるなら本望です。」

顔を上げながらそう言った彼女の顔は少し悲しげな顔だった。

「ただ、1つだけ心残りがあります。それは・・・」

「・・・ムサシの事か・・・」

ムサシとは、この宇宙戦艦ヤマトの2番艦の事だ。その艦の艦魂はヤマトの妹であり、ただ一人の家族である。

「それもあります。けど、それではないんです。」

ヤマトは、少し頬を赤めらせていった。

「それは・・・あ「アクエリ阿斯、土星軌道まで約2時間。地球まであと5時間で接近します。急いでください!!」

航海員の言葉に遮られ、聞こえなかったが、そんなこと気にしている暇はなかった。

数分後、ヤマトはアクエリ阿斯の大気圏外に出て、地球に向かって出発した。

「!前方、正体不明の敵艦隊。メインパネルに切り替えます。」
レーダーを操作していた森雪が言った。

「あれは・・・ムガール大總統が脱出した宇宙船だ。」

戦闘班隊長、古代進が気が付いた。

「総員戦闘戦闘配置につ」待て! ヤマトはトリチウムを満載しているんだ! 動く水爆のようなものだ! 一発でも敵の砲弾が命中したら一溜まりもないぞ! 交戦はせず、一刻も早くワープのチャンスを探すんだ!」

ヤマト艦長、沖田十三が貫禄のある声で命令した。

「はい! ワープ準備、急げ!」

古代の右隣、本当は航海長が座るべき場所に扶桑は座っていた。

「ヤマト、心配するな。きつと敵艦隊を突破できる。」

「わかってます。けど・・・」

ヤマトの体が震えている。これまで戦ってきた中で、今、一番恐怖を感じているのであろう。

「大丈夫、俺が付いているからには、絶対死なせはしない!」

「扶桑さん・・・」

そうしている間にも、敵艦隊はどんどんヤマトに近寄ってくる。

「敵ミサイル、発射体制に入りました!」

雪の悲鳴に近い声が聞こえ、2人はメインパネルを見上げた。

「だめだ・・・もう間に合わない・・・」

古代の諦めた声が近くで聞こえた。しかしその数秒後、敵艦隊の一角が爆発した。

「見ろ、あれはデスラー艦だ！」

メインパネルにデスラーの姿が映し出された。

「デスラー、無事だったのか。」

「ああ、たまたま星間国境の巡視に出かけていてな。その節は失礼した。一言礼を言いたくてね。間に合ってよかった。地球の状況は知っている。あの邪魔者は私が引き受けよう。」

古代以外の人は啞然としていた。

「古代、何をしている。早く行け！」

そして、ガミラス艦隊の攻撃により、敵艦隊は撃滅された。

地球近くの宙域

ヤマト乗組員の総員離艦が進む中、扶桑とヤマトは戦闘機格納庫に通じる道を進んでいた。

「・・・これで、ヤマトとはお別れだな・・・」

ヤマトは無言のままだった。

「ヤマト、俺はどうしたらいい？このままここに残っていた方がいいのか？それともフツキに乗って、生き残るべきなのか？」

扶桑は、沖田艦長がヤマトと共に死ぬ気にいるのは知っている。ついさつき、ヤマトから告げられた。

「・・・それは、生き残ってほしいですよ。だってあなたは、私が生まれ変わった日から一緒に過ごしてきた人なんですから。それに・・・」

「それに？」

ヤマトの頬がりんごの様に真っ赤になっていく。

「扶桑さん、いえ、良介さん。私はあなたのことが大好きです。だから、生き残って地球で幸せに暮らして下さい。これが、私の最期

の望みです。」

「・・・ヤマト・・・」

今にも泣きそうな顔を必死で笑顔にしていた。

「さあ、行って下さい。私は、地球をそして、愛するあなたの未来を守るため、死に行きます。」

しばらく沈黙した後、扶桑がヤマトの肩を抱き寄せた。

「ヤマト・・・俺は・・・俺ってやつは・・・」

いつの間にか、扶桑の目から大粒の涙が流れ落ちた。

「良介さん。泣かないで下さい。さあ早くフユツキに移ってください。」

「ヤマト、俺からの最後のプレゼントだ。」

そう言うときヤマトの唇に自分のそれとをくっつけた。そしてそれを離すと、同時に戦闘機格納庫へと走り去っていった。

「さようなら、良介さん・・・」

そして、ヤマトは生きては帰られない攻撃をし、アクエリアスの海へと消えていった。

あの時、なぜ俺はさよならを言わなかったのか、正直後悔している。あの後、フユツキに移った俺は、ヤマトの最期を見ずに地球へ帰ってきた。そして今、彼女とヤマト乗組員の戦士の塔の前にいる。「ヤマト。お前はこの星、地球を救えて満足だったのか？」

東京の小高い丘の上に作られた塔の前で思わずそう言った。

「はい。」

後ろから声が聞こえた。一瞬幻聴かと思ったが、後ろを振り返ったとき、その考えは消えた。

そこにいたのは

「ただいま、良介さん」

紛れもない、彼女だった。

（後書き）

いかがでしたか？感想またはアドバイスをお願いします。

設定では、宇宙戦艦ヤマトの同型艦のムサシがいることにしています。が、出てきこないのをご了承お願いします。

それと、次回の投稿は未定ですので、リクエストがある場合は感想に書いてください。それではこれで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251m/>

宇宙戦艦ヤマト ～地球を愛した少女～

2010年10月10日03時17分発行